

銅鐸とはなにか？

奈良国立文化財研究所

佐原

眞



こんにちは、佐原です。

今、安井館長から「銅鐸の第一人者」と紹介されました。そう言われると格好いいんですが、銅鐸をやってる人は少ないんです。一生懸命やってる人というの、二、三人でしょうか。だから、そういう意味ではみんな第一人者です。私は今、「考古学をやさしくしよう」という運動を起こしてまして、「喋る時も書く時も、考古学に関心のない人が聞いてもわかる言葉で喋り、書く」ということをモットーにしております。ただ、自分のわかっていることをわかりやすく言うことはできないわけですが、わかっていることをわかりやすく言うということは不可能です。安井館長に「銅鐸とは何か？」という標題を与えられてしまいました、それはわからないのです。ですから、「なぜわからないのか」ということを、わかりやすくお話したいと思っています。

\*なぜ銅鐸と呼ぶのか

まず「鐸」の字ですが、この字は日本国民として生まれて一度も習うことはないし、使うこともない字です。なぜ「鐸」という言葉が使われるようになったか、という説明から入った方がいいと思います。

今から三五〇〇年くらい前、中国には殷あるいは商という時代がありまして、たくさんさんの青銅器を作り始め、使い始めました。「青銅」とは、銅に錫を加えた合金のことで、「青銅」と言っていますが、英語で「ブロンズ」と言った方がわかりやすいかもしれません。一つ断らなければいけないのは、銅に錫を加えたものが「青銅」なんです、このことを単に「銅」と言うことがあるんです。これ、ひじょうにややこしいですね。つまり、「銅」と言う場合には、銅でできているものはもちろんのこと、銅に錫を加えた青銅のことも「銅」と呼ぶことがあるということです。今はなくなりましたけれど一銭銅貨も青銅ですし、駅前や公園などに立っている銅像、あれも実は青銅でできているんです。同じように、銅鐸も青銅でできているんです。だけでも「銅」と言うわけですよ。ややこしいですね。

実は私、きのうの今頃は上海と大阪の間を飛んでおりました。中国に八日ほどおりまして、向こうで殷・周の時代のたくさんさんの青銅器を見て参りました。殷・周の貴族や有力者たちは、たくさんさんの青銅器をおまつりに使いました。そのおまつりの道具の中に、たくさんさんのベルがあります。時代によって名前が変わったりしてややこしいんですが、簡単に三種類のベルの名前を挙げていきま

しょう。「鈴」、「鐘」、「鐸」です。「鈴」と「鐘」は我々が時々目にする字です。

「鈴」は日本では「すず」と読みます。猫の首に付けるあいうものを「すず」と言います。だいたい丸くて中に「丸」と呼ぶ粒がが入っています。丸は石のこともあるし、青銅でできていることもあります。そして、揺れて鳴ります。「鈴」は、中国でもすずの意味でも使います。しかし、もう一つほかの意味があります。それは、吊り手（Ⅱ「鈕」ちゆう）があつて、内側に棒（Ⅱ「舌」ゼツ）があつて、それが揺れ鳴る。そういうペルを、「鈴」で表わしているわけです。

「鐘」は我々に一番おなじみのある「かね」ですけれども、あれには「吊り手」はあるが「舌」はありません。これは、「叩き鳴らすカネ・あるいは撞き鳴らすカネ」です。お寺の釣鐘、昔火事を知らせるのにカンカン鳴らした半鐘、まさにこの「鐘」です。

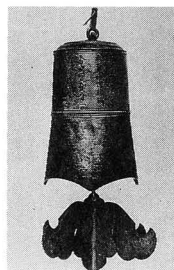
「鐸」はいったい何かといいますと、取手、つまり柄があつて、中に「舌」がある「振り鳴らすカネ」です。私は大阪の豊中で少年時代まで過ごしましたが、あのころのお豆腐屋さんやくず屋さんは「ジャランジャラン」と鳴らしながらやって来ました。それから、ここにお集まりの方で私より年上の方の中に

は、学校の授業の始まり・終わりがこのカネを振り鳴らした「ガランガラン」だったのを憶えていらっしやる方もあるかもしれません。私の時代には、もうサイレンになっていました…。

そもそも中国では、柄を付けて振り鳴らすものを「鐸」の文字で表わしたわけです。それが日本へ来てちょっと変わってしまいました。ところが大変なことでと思うんですが、日本では仏教とともに釣鐘が始まりますが、釣鐘が始まると同時に「揺れ鳴るカネ」も始まるんです。

例えば、奈良西大寺のある建物の上には、屋根の上に鳳凰がいて、鳳凰のくちばしに「銅鐸」が下がっているというようなことが書いてあります。これは「揺れ鳴るカネ」です。日本ではこれを「鐸」という言葉で呼び始めています。つまり「撞き鳴らす鐘」と区別して、本来中国で「鈴」と言っていたものを「鐸」と呼ぶようになったんです。奈良正倉院の宝物の中には、聖武天皇の一週忌に使った「鎮鐸」が残っています。その「鎮鐸」というのは、今私たちがいう銅鐸と形は少し違っていますが、基本的には、吊り手のある「揺れ鳴るカネ」です。奈良時代には、中国でいう「鈴」のことを日本で「鐸」と呼んだわけです。

正倉院の「鎮鐸」



何がすごいかというと、銅鐸が一番最初に出てきた記録は、西暦六六八年、

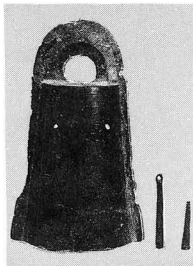
天智天皇七年なんです。滋賀県の大津市にある崇福寺というお寺の建設工事が出てきたんですが、その時に「宝鐸」、たからの鐸が出て来たという記事があるんです。次の記録は、『続日本紀』という書物にあるんですけども、西暦七一三年、和銅六年に「大和の国宇陀郡、ながおか長岡野という所から銅鐸が出て来た」と書いてあります。「銅鐸」という文字が現れるのは、この時が初めてです。何が偉いかというと、出て来たものを見て「鐘」じゃない、ということがわかったんですね、区別したんですね、奈良時代の人が…。

これは、私は大変なことだと思っんですよ。なぜかというと、銅鐸に伴う舌が見つかったのは昭和に入ってからのことなんです。まだ五〇年もたっていないかもしれませんが。銅鐸に伴う舌は、まず鳥取県で一つの銅鐸に伴って二つの舌が出て来ています。それから、兵庫県の淡路島で、江戸時代に出て来た銅鐸をお寺さんが持っていて、それと一緒に舌があるんですが、そういうものがあることから、「銅鐸とは本来そういう棒で鳴らしたんだ」ということが考古学的に立証されるわけです。奈良時代には舌が出ていなかったのに、撞き鳴らす普通の鐘と違うということを区別していた。これは大変なことだと思います。

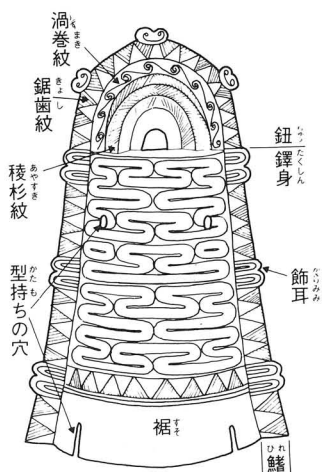
舌を下げた銅鐸



鳥取県出土の  
銅鐸と二本の舌



なぜ「銅鐸」と呼ぶのか、ということについては、そういうわけです。ですから、銅鐸のことを、よく「弥生時代のカネ」というふうに言ってしまうんですが、あれは誤解を招きます。「カネ」と言うと我々はお寺の鐘の方を連想してしまうから、私は最近では、強いて「ベル」と言うことにしています。銅鐸はベルの一種であるということです。



流水紋銅鐸と銅鐸の部分名称

## \* 銅鐸の紋様 その1 紋様の種類

一番上の部分が吊り手で、これはさつきも言いましたが、「鈕<sup>あき</sup>」と言います。それに対して、下の本体の方は「身<sup>み</sup>」と呼ぶか、あるいは銅鐸の本体ですから「鐸身<sup>たくしん</sup>」と呼ぶこともあります。鐸身の外側に突出する扁平な飾りの部分は、お魚のヒレに良く似たつきかたをしていますから、「鰭<sup>ひれ</sup>」と呼びます。

代表的な紋様の名前を挙げますと、今回出て来た跡部の銅鐸は、「流水紋<sup>りゅうすい</sup>」を飾っています。見ていただいたら良くおわかりのように、日本の中世以来の紋様で、水を表わす時にこのようになります。「菊水」なんていう紋様も、水がこのように現わします。これに似ていることからついた名称ですが、水を表したものがどうかはわかりません。私は、水を表わしたものではないと思います。

それに対して、縦の帯と横の帯を交差させる紋様のことを「袷袷<sup>けさずさ</sup>襷紋」という難しい言葉で呼んでいます。横の帯の本数は三〜四本あって、帯には斜めの格子がはいることが多いです。実は、これはお寺の釣鐘の紋様の名弥なんです。お寺の釣鐘の紋様も縦横の帯を交差させていて、これを江戸時代から「袷袷襷」と呼んでいます。その紋様の名前を借りているわけです。名前の由来は、お坊さんの着る袷袷に縦横の帯の交差する紋様があることから来ています。

銅鐸の身を飾る紋様には、「流水紋」・「袈裟襷紋」<sup>けさすもん</sup>が一番多いです。それ以外には、横の帯だけでできている「横帯紋」<sup>おうたもん</sup>と呼んでいる紋様もあります。

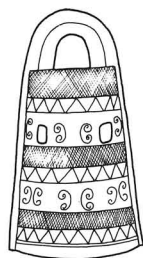
鰭を飾るものには、三角形が連なった中に斜めの線のある紋様がありますね。これは「鋸歯紋」<sup>きよしもん</sup>と言いますが、昔は「銅鐸式鋸歯紋」と呼びました。なぜかというところ、「鋸歯」<sup>ノコギリ</sup>歯」というのはジグザグのことですから、その中に線が入っていいようにいますが、とにかく鋸歯紋なわけです。銅鐸の鋸歯紋には必ずこの線が入っていますから、昔は「銅鐸式鋸歯紋」と呼びましたが、現在銅鐸の話をする時に「鋸歯紋」と言えば、この線の入った「鋸歯紋」のことを指すわけです。

吊り手の部分には、「綾杉紋」<sup>あやすぎもん</sup>という紋様があります。「杉綾」と呼ぶこともあります。銅鐸の場合には、「綾杉」と呼んでいます。それから、渦巻きがありますね、それは「渦巻紋」と言います。

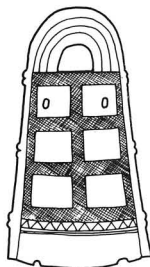
### \* 銅鐸の作りかた

銅鐸をどうやって作るかをお話ししましょう。鋳物を作る方法は、型を作って、そこへ溶かした金属を流し込むのです。

横帯紋銅鐸



袈裟襷紋銅鐸



一番簡単な方法は、一枚の型だけで作る方法です。幼稚園の子供たちが、粘土遊びでやっています。ゾウさんなんか彫り窪めてあつて、そこへ粘土を詰めるのとゾウさんの姿が立体的に突出するような型があります。

こういう鑄造品はたくさんありまして、すぐに浮かぶ日本の代表例は、伊丹市にある伊丹廃寺というお寺の塔の一番上に使っていた「水煙<sup>すいえん</sup>」が一枚型でできています。一枚型でできているということは、一方から見ると突出していますが、逆から見ると、ただ平らで汚らしいだけのものです。秦の始皇帝が作った銅のお金「半両錢」というのもそういうものです。鑄造技術の一番初歩的なものは一枚型です。

今度は二枚型です。さっきのゾウさんを両側に、しかも左右相称に向きを変えたものを作ってやれば、両側から見てゾウさんに見えるものができます。鯛焼きがそうですね、右向きと左向きのお魚の鑄型を使って作るわけです。

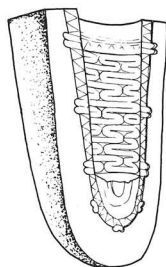
だけど、これでもまだ銅鐸はできないんです。なぜならば、銅鐸は鐸身の内部がガランドウですから、今言った鯛焼きよりも複雑な鑄型が必要になって来ます。というのは、銅鐸の場合は、内側にも型があるわけです。古い銅鐸は石で鑄型を作っているんですが、これはすごいことですね。たとえば大部分の仏

像が青銅できていますが、あれは彫刻師が木や土で仏様の姿を作ってそれから型を起こすわけでしょう？ だから完成した姿をまず最初に見て、それから型を作るわけです。ところが、石を鋳型にする場合は完成した姿がないわけです。見えないわけですよ。完成した時に初めて「ああ、こういうことだったのか」ということがわかるわけで、仕上がった状態を頭の中で考えて彫るわけですから、これはすごいと思います。

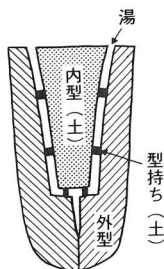
中空の鋳物を作るためには、外型の中に内型をはめた鋳型がいるわけです。そうでないと、中空のものができません。そこで、まず、石で鋳型を半分作ります。まったく同じものをもう一つ作ります。その次に、一番簡単な方法として、二つの型を合せた中の空間に土を詰めます。すると銅鐸のようなものができるようになります。その表面を削り取って内型を作りますが、簡単には削れません。というのは、削り込んだ幅が将来できる銅鐸の厚さになるからです。石でできた外側の型の中に、土でできた内側の型をはめこんだ状態にして、そのまわりに溶けた銅を注ぎます。

当り前のことですが、この時に内側の型が外側の型にひつついてしまうと、できあがった銅鐸には大きな穴があいてしまいます。また、どちらかへかたよ

石の外型



銅鐸鋳造の模式図



ってしようと、一方が厚く一方が薄くなってしまう。そこで、内側の型がズレないように、「型持ち<sup>かたもち</sup>」という支えを置きます。この「型持ち」を置くことによって、内側の型が外側の型にキチンとついて、ずれることはありません。現在の铸造ですと、型持ち自体が金属でできていて、熱くドロドロになった金属を注ぐと溶けてしまつて製品の一部になつてしまふ、という方法があります。けれども銅鐸の場合はおそらく土で「型持ち」を作っているために、仕上がつた製品ではそこに穴があいてしまひます。それが、型持ちの穴です。

そしてもう一つ銅鐸にとって重要なことは、銅鐸の一番下の部分、内側の裾から少し入つたところに突出した帯があるということです。突出した帯があるということは、外側の型が石であつても内側の型は石ではあり得ない、ということの証明になります。内側の型は土じゃないといけないんだ、ということになります。

さて、熱くなつた溶けた金属のことを「湯<sup>ゆ</sup>」といいます、裾の側から湯を注ぎ入れますと、それがフワーツと全体にまわつて上がっていきます。それで終わるわけなんです、空気が入り込んだりして铸造がうまくいかない場合があります。空気が入ると気泡ができてしまひ、その部分には湯がまわりません。

から、穴があいてしまいます。そういう場合は、穴のあいた部分に、いったん鑄造が終ってから改めて湯を入れて補ってやるわけです。ところが、銅鐸というのは鑄型に刻み込んだ部分が紋様になりますから、紋様の線はすべて突出していますね。朝鮮半島の青銅器文化では、鑄型の段階で突出した紋様を作ることができたので、仕上がった状態での沈んだ紋様や絵があります。この技術は日本には入って来ていませんから、日本のすべての青銅器の紋様は、製品では突出しているわけです。だから、部分的に鑄造が失敗して穴があいてしまうと、後からいくら銅を入れてもその部分の紋様を突出させることはできないのです。そこで、そこには鉄の刃物で線を刻むわけです。

今回の銅鐸は、鑄造を失敗したためB面の一番上の流水紋の上から七段目あたりに、後から線を引き直しています。それをこの話が終わってからゆっくりご覧下さい。銅がうまくまわらないで、後から線を刻む銅鐸は、たくさんあります。銅鐸にとつては、紋様を完全につけるということがひじょうに大事なことです。

また後ほどお話をしますが、銅鐸には絵を描いたものもあります。絵を描いたものは、失敗していても絶対に補うことはしていません。というこ

とは、銅鐸にとつては紋様が一番大切なんですネ、絵は付け足しなんです。そういうことは、また後でお話ししましょう。実は、銅鐸にとつては、紋様がついているということがひじょうに大事なことです。

### \*銅鐸の埋まり方

さて、この不思議なる銅鐸は、正確に何個出ているかわかりません。なぜかと言うと、例えば、「八尾市春日町の跡部遺跡から銅鐸が出た」ということは確実なことです。ところが、先ほども言いましたが、銅鐸が見つかり始めたのは西暦六六八年という大昔からでしょう。そうすると「どこそこで銅鐸が出た」という記録が残っていても、その銅鐸自身がどこへ行ってしまったのか、わからないものもあります。あるいは淡路島の場合がそうですが、ある文献には「七個出た」と書いてあるのが、ほかの文献では「三個」となっています。また、銅鐸自身はあるけれども、どこから出て来たのがまったくわからないものもあります。さらに、「どこそこから出て来た」と伝えられている銅鐸があります、これは本当にどこからでたかわかりません。ですから、銅鐸の本当の数はわかりません。皆、適当に書いているのです。とにかく、最近では

「四百個から五百個」と言っているでしょうか。銅鐸は、西は中国地方の島根・広島、四国の香川・徳島・高知、東は福井・岐阜・長野・静岡というふうに、近畿地方を中心としたその範囲で出ています。ただし、九州で銅鐸の鋳型が二箇所から出ていますから、九州にもあった可能性があります。

展示室でご覧になったように、銅鐸は、すべてが穴に埋められた状態でみつかっています。しかも、出土状況のわかっているものの絶対多数が、銅鐸を横向きに寝かせて埋められています。大切なものなら、掘った穴の壁に石を積んだり、上に蓋石を被せたりしても良さそうですが、そういうことは一切していません。

今回の銅鐸は、八尾市の中でもひじょうに低い所から出て来ました。八尾から銅鐸が出たと聞いた時、私は当然山寄りの所だと思いました。ところが、来て見たら平地だったので驚きました。というのは、大多数の銅鐸は斜面に埋められているからです。

つい最近静岡で銅鐸が出て来て、もうそろそろ発掘が始まりますが、これはご当地八尾の方が金属探知機で銅鐸を見つけれ、教育委員会へ届けられたことが契機になったわけです。そこへもついこの間行って来ましたが、やはり斜

面でした。もう少し頑張れば頂上へ着くというような所でした。頂上には埋めずに、頂上より少し低い所、頂上を意識した所に埋めていることが多いんです。それが最近では、低い所からでも出て来る例が増えて来ています。今日、私の前に発表されました大福遺跡・名東遺跡・高塚遺跡、みんな低い所の例です。そうですね、私は数を数えていないのでわかりませんが、おそらく銅鐸の八割から八割五分くらいが丘の斜面から出ていると言ってもいいでしょう。しかも、そのうちの大多数が、弥生時代の村の中からの出土ではありません。丘の斜面ですから、おそらくは人里離れた所に埋められたのでしょう。それが、銅鐸の分布であり、埋められ方です。

### ＊銅鐸の性質（年代の決めかた 型式学的研究）

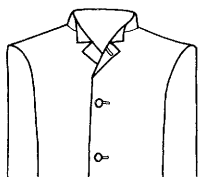
それでは、銅鐸とはいったいどういうものであるかということ、その性質を考えてみましょう。性質を考えるには、まず、銅鐸を年代の順に並べなくては いけません。なぜかという、一番古い銅鐸を使つて「銅鐸がいかにして消えたか」を論じることが意味がないし、一番新しい銅鐸を見て「銅鐸の起源」を考えるのも意味がありません。ですから、銅鐸自身の順番を決めなければなら

いのです。ところが、順番は決めにくいわけです。なぜならば、普通の考古学の発掘で村の跡やお墓を掘っていると、この土器とあの石器が一緒に出てくるということから、年代が決めやすいんです。それに対して銅鐸は、一つだけポツンと出て来ることが多いので、なかなか順番が決めにくいのです。

そこで、考古学では「型式学的研究」と言うんですが、銅鐸自身を比べて順番を決めます。銅鐸は、パツと見たらみんな同じように見えますが、そのつもりで見ますとずいぶん違います。この「銅鐸を年代の順に並べる」<sup>へんねん</sup>「編年」という仕事をしなければなりません。その場合に有効な手掛りになるのは、「役割・機能を持っていた部分とその機能を失う」ことを見付けることです。私はこの話をする時には、必ず背広の説明をすることになっています。



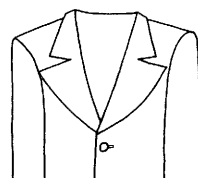
①



②



③

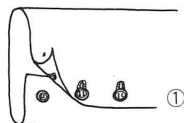
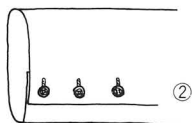
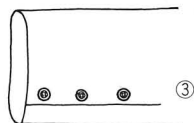


④

背広の編年

背広は元々「詰め襟」なんです①。それをヨーロッパのどこの国の人でしようか、ワイシャツを腕まくりするのと同じように、わざわざ第一ボタンをはずして着る人がいたんですね。これが背広の起源です②。私が今着ている背広は襟を折ると「詰め襟」のようになります③。しかし、テレビで歌ったり踊ったりしている人の背広にはすごいのがあって、襟を倒してももう元の「詰め襟」には戻りません④。そうすると、考古学的には「本来の機能を残している③が古い性質を持っていて、④のようにその機能をなくしたものが新しい」と考えて、その逆になることはありえないと判断します。

こういう例は、背広の袖口にも見られます。袖口のボタンも最初はワイシャツの袖のように開け閉めができたときの名残りなんです。かつては開け閉めをしていたわけです。そして、糸で作ったボタン穴の名残がありますよね、綴じてあります。本来はボタンとボタン穴が付いていた①わけですが、そこにボタンをつけて、さらにボタン穴のように糸でかがって、あたかもボタン穴にボタンを掛けたかのような形をまねています②。ところが、もう少し略式になりますと、ボタンは付いていてもボタン穴はありません③。これも、本来「開け閉め」の役割を持っていたものがドンドン消えて行くわけですから、②から③へ



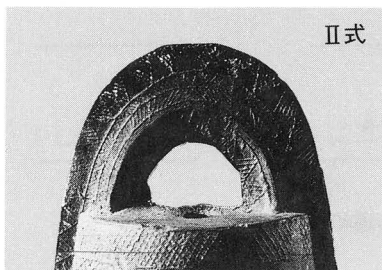
袖口の編年

と新しくなっても、その逆はあり得ないのです。考古学では、そのような見かた、考えかたをするわけです。ところがややこしいことに、ワイシャツは今でも開け閉めしているわけですから、背広とワイシャツを一緒にすると混乱してしまいます。背広とワイシャツが同じ種類のものだと誤解してしまうと、どちらも同じ時代のものでありながら、「ワイシャツが古くて背広が新しい」という誤解をしてしまうこともあり得るわけです。

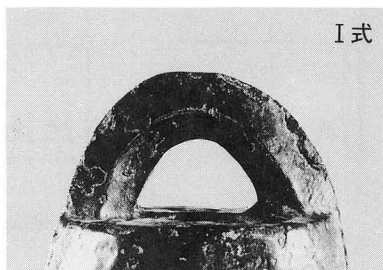
自動車为例にしますと、トラックが最も古い性質を持っていて、スポーツカーが一番新しい性質を持っています。乗用車はその中間の性質を持っていますと言えます。将来の考古学者が、乗用車とスポーツカーと一緒に研究すると混乱してしまいます。乗用車は乗用車、スポーツカーはスポーツカーで「編年」、いわゆる変遷を追って行かなければいけないわけです。

そういうような研究方法を「型式学的方法」といいますが、これを銅鐸でやりました。私が学生時代の頃のことですから、すでに三〇年くらい前になりました。その時にやったのは、吊り手の中にある「綾杉紋」の部分の観察です。今回の銅鐸は複雑な紋様を持っているんですが、不思議なことにどの銅鐸を見ても、吊り手の内側にある綾杉紋のところが突出しているんです。ほかは平らな

Ⅱ式



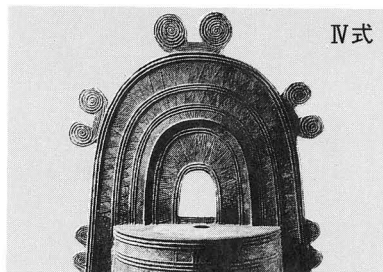
Ⅰ式



んですが、綾杉紋で飾られている部分だけが突出しています。ここを縦に断ち切ると、断面形が菱形になります。あれが不思議でしょうがなかったんです。今回の銅鐸には菱形の外側にも内側にも平らな飾りの部分があります（Ⅲ式）が、外側にしか平らな部分がないものもあります（Ⅱ式）。さらに、きわめて少数ではありますが、吊り手が菱形の部分だけで成り立っている銅鐸のあることも知りました（Ⅰ式）。

そこで、菱形の部分こそ本来の「吊り手」の役割を果たしているもので、平らな部分は吊り下げるのには必要ないけれど、飾るのにふさわしいことから、菱形の部分から平らな部分を作り出したんじゃないかと考えたわけです。そのようなことから、私は銅鐸の移り変わりを考えました。

Ⅲ式では、外側だけではなく内側にも飾る所を作っています。装飾の部分を加えています。その次に来るものとして、基本的にはⅢ式と同じ形でさらに太い線を加えたものがあります（Ⅳ式）。その形のものは、滋賀県野洲町小篠原（このはら）という所からたくさん出ていますし、この近くだと羽曳野市西浦という所からも出ています。吊り手の部分が小判形というのか馬蹄形というのか、ひじょうに長く伸びていて、菱形の部分も一つだけではなく、いくつも重ねています。



Ⅳ式



Ⅲ式

小篠原の「一番最後の銅鐸」に高さ一三五センチメートルという大きなものがありますが、これには菱形の部分が三つも重なっています。この銅鐸を作った人は、この部分がもともとは「吊り手」であったということを完全に忘れ去ってしまっていて、「飾りの帯の一つ」としてしか理解していなかったというわけです。

今話しているうちに気がつきましたけれど、京都国立博物館の難波洋三さんがここに来ておられますが、彼は私の分類をさらに細かくしてくれたと同時に、訂正をしてくれました。ですから、現在では銅鐸はかなり細かく区分できるようになっていきます。

### \*銅の成分

今度は銅の成分です。先ほども言いましたが、青銅とは、銅に錫を加えた合金です。銅鐸の原料はひじょうに重要なわけですが、これについては相入れない二つの説があります。

一つの説は、久野雄一郎さんの「日本の銅を使った」というものです。これは、特に新しい銅鐸には溶けきれていない銅の結晶が入っていて、その結晶を

調べた結果から、日本の銅を使ったに違いないという説です。

もう一つの説は、馬淵久夫さんという東京国立文化財研究所の方の説で「中国あるいは朝鮮半島の銅を使った」というものです。銅鐸を鑄造する時には鉛を加えるんですが、鉛に関しては、古いもの（Ⅰ式からⅡ式）には朝鮮半島の鉛が入っていて、新しいもの（Ⅱ式の一部からⅣ式）には中国の鉛が入っています。ちなみに、古墳時代の鏡などの青銅製品には中国南部の鉛が入っていることが確実にわかっています。そして、馬淵さんは、鉛だけではなくて銅や錫も、古いものは朝鮮半島から、新しいものは中国から来たと考えています。

いろんな考え方の違いがありますが、私の考えでは、近畿地方では弥生時代前期（Ⅰ期）から銅鐸を作り始め、後期（Ⅴ期）のある時まで作っています。

その間、近畿地方が銅鐸鑄造の中心地であったことは確実ですから、どの原料であれ連続的に集中して銅鐸の原料を確保していたということは確かなことです。そして、奈良県の唐古遺跡や、大阪府東大阪市の鬼虎川遺跡、同じく茨木市の東奈良遺跡などから銅鐸の鑄型が出ています。中でも特に、東奈良遺跡からは銅鐸の鑄型がたくさん出ていまして、銅鐸を鑄造する技術者がそこに常駐していたということが認められるようになって来ています。

# ＊銅鐸の鳴らしかた

銅鐸の変遷に伴って重要なことは、吊り手の形の移り変わりからでもわかるように、本来は「耳から音を聞くためのもの」でした。それが新しくなるにつれ、「見ること」が重要になって来ました。銅鐸の性質が変わって行っとうことです。田中琢さんはそれに対して、Ⅰ式からⅢ式までを「聞く銅鐸」、Ⅳ式を「見る銅鐸」と呼んでいます。明確に性格がわかります。

古い銅鐸が鳴らされたに違いない、ということは、銅鐸の下から見てすぐの所にある帯の一部分が、棒と接触して擦り減っていることから確実です。ところが、どうやって鳴らしたかについてはわかりません。もし吊り下げて鳴らしたのであれば、吊り手が摩滅していてもいいはずなんです。銅鐸の起源と密接な関係があると思われるものに、朝鮮半島の「朝鮮式小銅鐸」と呼ばれているものがあります。これは吊り手が擦り減って、上の部分が細くなっています。銅が擦り減るか？と思われるでしょうが、実は擦り減るんですね。また、古墳時代に「三環鈴」という鈴のような物を連ねたものがあります。これには古いものと新しいものがある、古いものは本当によく擦り減っている部分があります。これも、ぶら下げて使っていたから擦り減っているんですね。



朝鮮式小銅鐸

だから、銅鐸もし吊り下げて鳴らしたんなら、そして内側の帯があればど  
擦り減るまで鳴らしたんなら、吊り手の部分に「紐ずれ」というのか、摩滅が  
残っていて当然なんです。それが無いのです。不思議ですねえ。私は実験し  
たことはないんですが、抱え込んで揺すって鳴らすことしか考えられないんで  
す。古い銅鐸には身の部分が摩滅しているものがありますから、そういう方法  
も考えられないことはありません。だけど、抱え込んで鳴らすなんてねえ。  
本当に困ったことです。見て来たように「鳴らしたんだ」と言っているんです  
が、吊り手に紐ずれの跡がありませんから、吊るして鳴らしていません。吊る  
せば絶対に紐ずれの跡は残りますから……。だいたい銅鐸というのは、鳴らすの  
が無理な構造のカネなんです。

私の考えをごく簡単に言ってしまうえば、銅鐸の起源は家畜の首に吊り下げら  
れたベルだということです。家畜だと動いてくれるから鳴ってくれます。これ  
を鳴らすためには内側に「舌」をぶら下げておけば、簡単に揺れて鳴るんです。  
銅鐸は叩いて鳴らすカネではありません。棒（舌）がありますから。もしも  
舌の下にも孔があれば、昔の軍艦や汽車のベルのように、舌の下の孔に紐を通  
して、それをひっぱって「チョンチョン」と鳴らす方法が考えられますが、そ

ういう孔もありません。しかし、鳴らしたには違いないんです。「どうやって鳴らしたか」これがたくさんある銅鐸の謎の中の、未だに解決できていない謎の一つです。私は、それについては「わかりません」としか答えられません。

わからないことがたくさんあって、一度懲りたことがあります。出雲の荒神こうじん

谷から銅剣が出て来た時に「わからない」と言ったら、新聞記者に「わからないなら誰でも言えますよ」と言われました。口はばつたいようですが、青銅器を永年にわたって勉強して来た者が「わからない」と言うのは、同じ「わからない」でも少しは重みがあるんじゃないかと、うぬぼれていましたが、「わかりません」と言うと「誰にでも言えますよ」と言われてしまいました。

「銅鐸とは何か？」については答えられません。わからないんですから……。そのわからないもののうちの 하나가、今の問題なんです。

### \*銅鐸の使いみち

「銅鐸は何に使ったか」これもわかりません。そして、「なぜ埋めたのか」これもわかっていません。なぜ埋めたのがわかれば、銅鐸の謎はかなり解決されると思います。

幸いにして銅鐸が発掘されるようになりました。夢のような話です。私が銅鐸を勉強し始めたころには、銅鐸の鋳型も見付かっていなかったし、銅鐸が発掘されることもありませんでした。「銅鐸が出た！」と聞いて飛んで行きますと、「この辺にありましたワ」とか、「この辺ですワ、もうちょっと高いところやったかな？」と空中を指されました。穴が無くなっているのが当り前でした。今回の銅鐸で重要なことは、「穴の底に銅鐸を固定するための粘土が敷いてあった」ということがわかったということでしょう。これは、おそらく初めて注意されたことだと思えます。それからもう一つは、「銅鐸が入っている穴の土は粘土っぽくて、銅鐸の穴の外は割に砂っぽい」というように、銅鐸の埋まっていた穴の内と外で土が違ふということが認められたことで、これはひじょうに大切なことです。同じようなことは、先ほど報告があったと思いますが、高塚遺跡や同じく岡山の百枝月ももえづきという所でも、穴の内側と外側では土が違ふということが認識されています。

これがなぜ大切かというと、「さあ銅鐸を埋めましょう」と言つて、穴を掘りました。そして穴の中に銅鐸を入れて、掘り返した土を戻します。そうすると、穴の内と外の土は同じはずです。ただし、銅鐸を埋めるべき所の土が、た

たとえば黄色・黒・砂という具合にいくつにも層が分れていれば、それが混ざった状態で穴の中に戻されますから、外とは区別ができます。そういう程度の差というのが、正直なところかもしれません。ただど少なくともいくつかの銅鐸について、穴の中と外の土とが違うということが認識されたということは、大切なことなんです。つまり「さあ埋めましょう」と言って、ポツと埋め戻したのではないということになりますから。

銅鐸は、「一回きり埋めた」という考え方と、私のように「普段は土の中に埋めていて、おまつりの時に出して来て、使うとまた埋める」という考え方とがあります。私の場合は、同じ穴に何度も出したり埋めたりしてもかまわないし、そのたびに埋める場所を変えてもかまわないんです。かつて「銅鐸は埋めるために作られた」と考えた人がいるんです。つまり、「作つたらすぐに埋めちゃった」という考え方ですが、あり得ないとは言えません。けれども内側の帯が擦り減っている銅鐸もありますから、古い銅鐸はかなりの長い期間、使っていたことも確かでしょう。というように、一つの銅鐸について、どういう状態で埋まっているのか、銅鐸自身がどういう状態なのかを観察しなければなりません。今回の銅鐸についても、かなり進んだ観察をしてられますから、や

がてそれらを報告されると思います。とにかく、埋まりかたや埋めかたが、銅鐸の扱い、ひいては銅鐸の性質を明らかにする一つの重要な鍵を握っていると言えます。

かつて、銅鐸は社会が急変した時に埋められると考えられていました。現代の日本では言えば西暦一九四五年、昭和二〇年にあれだけ世の中がガラッと変わりました。その時と同じような時、「弥生時代から古墳時代へと社会が変わってしまう時に、社会の変事に際して埋められたのではないか」とか、「敵や他の民族がやって来るから取られないように埋めてしまった」というような考え方もありました。けれども、それはないでしょう。なぜならば、わかっているもののほとんどすべての銅鐸は、同じように鱗を立てて横向きに寝かせて埋められています。もし急いで隠すために埋めたのなら、いろんな向きがあつてもいいはずです。せっかく堅穴住居という半地下式の家に住んでいるわけですから、家の中に埋めたつてかまわないでしょう。石をかぶせてもいいでしょう。問題は、先ほど萩原さんが報告された大福遺跡です。方形周溝墓の入り口とおぼしき所から出ているということですが、本当にそこへ埋めたんでしょうか。私は彼を信頼していますが、一つの例だけでは「本当かなあ？」と思つてしま

います。大福遺跡のような例は今のところ特殊例で、そういう例が他にもいくつか重なる、「それはそうだ」ということになって来るでしょう。

とにかく、埋まりかたや埋まっている土の観察が、「銅鐸をどのように埋めたのか」とか、「埋めたのは一回きりなのか」などという銅鐸の性質を決定するでしょう。羽曳野市<sup>はびきの</sup>の西浦銅鐸の場合、なかなか内と外の土の区別がつかなかったそうです。けれども、銅鐸が埋まっているからには埋めたに違いない、埋めたのなら穴の線が出るはずです。あとで聞いたんですが、穴の内と外の土の性質はほとんど一緒に、「よくここに線のあるのがわかったね」と皮肉を言われたそうです。だけど、考古学ではそういうふうに線を引かなければいけないんです。今回は、幸いにして、土の違いが良くわかったということです。

東南アジアに「銅鼓」という銅の太鼓があつて、おまつりやお葬式の時に取り出して使っていますが、普段は土の中に埋めておきます。おまつりの道具を普段は埋めておくのは世界中のあちこちにあることでして、銅鐸についても普段は埋めていたと私は考えています。埋めていたんだけれど、最終的に銅鐸を使わない社会になったから、埋めつばなしになったという具合に考えていますが、それもまだわかりません。

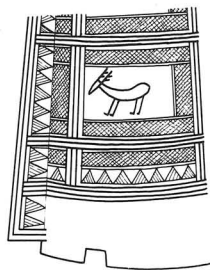
＊銅鐸の紋様 その2 庶民の紋様と貴族の紋様

銅鐸の用途を考える一つの手掛りに、紋様や絵があります。岡山から出た弥生土器の紋様に、銅鐸の紋様と共通するものがあります。銅鐸の紋様とよく似ているということでは、岡山市津島の弥生土器の高杯ほどよい例はありません。

銅鐸も土器も同じ弥生時代に作られた物ですから、同じ紋様で飾られていて当然だと思われるでしょう。ところが、紋様が共通していることが、銅鐸の性格を知る一つの手掛りになるのです。紋様の中には、意味のある紋様や単なる装飾などがあるでしょうが、共通する紋様で飾られた土器を使っている一般の弥生人が銅鐸を見れば、共感を持つというか、ひじょうによくわかるわけです。

ところが、中国の殷や周の時代のおまつりの道具は銅鐸と同じ青銅でできていても、「饗饗紋」などのひじょうに奇怪なとてつもない紋様があります。これは貴族社会の紋様で、一般の人々には関係のない紋様です。日本の例として、奈良正倉院の宝物には「宝相華紋」を始めとするいろいろな紋様があります。

あれは社会全体から見ればごく一部の身分の高い人達のための紋様で、当時の一般庶民にはまったく関係がない紋様だったのです。当然のことですが、階級社会が成立すると同時に紋様も独占されるわけです。一般の人々は飾ることな



シカのある銅鐸  
(静岡県恵ヶ谷)



シカの絵のある弥生土器  
(岡山県津島遺跡)

んでできないのです。飾としても、全然違う紋様を使います。

その点、土器と銅鐸の紋様が共通しているということは、銅鐸がみんなの物であったということの一つの証拠になると思います。昔から、「お墓に埋められた銅鐸はないことは、銅鐸が特定の人の持ち物でなかった証拠」と言われていますが、これも銅鐸が村またはいくつかの村の集った社会の共有物だということの表われです。紋様の共通性もそのことを示しています。

### \* 銅鐸の絵 原始絵画

縄紋時代にも絵がないことはなかったんですが、縄紋時代の絵はひじょうに点数が少ないのです。炭素14年代というのが正しければ、八千年から一万年ほど昔から二千五百年ほど昔までが縄紋時代ですけれど、絵はまだ四―五点しかありません。その代わり縄紋時代には、土偶どぐうのような立体的に表現したものが多いです。弥生時代になると銅鐸や土器に絵が描かれるようになりますが、これは当り前のことなんです。なぜかと言うと、縄紋時代の土偶は、立体を立体で、三次元を三次元で表わしていますから、ある意味では簡単なんです。ところが絵というものは、立体を平面に、三次元を二次元に翻訳しなければなり

ません。これは難しいことでして、実際にはできないことです。

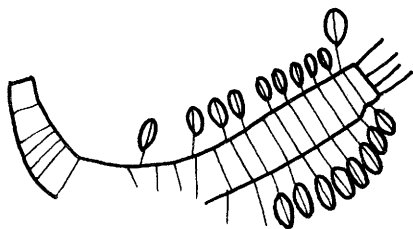
世界地図は地球儀を展開してありますから、本当はインドはグリーンランドの2倍の面積があるのに、地図の上ではグリーンランドがインドの2倍に描かれています。立体を平面に置き換えるのは不可能で、ごまかしが必要です。このごまかしをたくみに利用したのが、みなさんの中にもファンが多いでしょう、ご存じのエッシャーです。エッシャーの「だまし絵」は、高い所から水が流れて来るかと思うと、その水がまた高い所へ戻るといような絵ですね。あれは平面の世界だから、それをあたかもあるがごとくに描けるんで、いくら彼が天才でも、三次元の世界ではできません。

さて、何が言いたいかというと、現在の私達の大多数の絵の描きかたは、一つの点から物を見て描いています。「遠近法」などというものも一つの点から物を見ているから言えることです。ところが、原始絵画というものはいくつもの視点から見えて描きます。たとえばオーストラリアの原住民のワニの絵にありますが、頭は横から、胴体は上から、そして尻尾はまた横から見えて描きます。ワニには、顔は横から見るのが印象的、胴体は横から見るのが印象的なんです。これと同じような弥生の絵で、高床倉庫は横から見えますが、はしごは正面か

から見ます。羨ましきかぎりです。子供の絵に共通しています。描いている方には矛盾がないわけで、所詮三次元を二次元に置き換えることは不可能なただから、いくつもの観点から見ようとピカソさんなんかもそういうことをやったわけです。「キュービズム」といいますが…。これが原始絵画の一つの特徴です。

銅鐸の絵や弥生土器の絵にもそういうことはよくあります。一番面白いと思つたものは、奈良県清水風<sup>しみずかぜ</sup>という所から出た土器に描いてあつた船の絵で、船は横から見て描いてあるんですが、両側にオールが出ています。同じようなことは福井県堀江町大石から出て来た銅鐸の絵にも言えます。これは、人が一人いまして、そのまわりに櫂が並んでいます。たとえば鹿を描きますと、胴体は横向きを描きます。足は四本描かないと気が済みません。足は横向きでも四本見えることもありますから許せるとして、顔は正面から見たものになります。

難しく言うとも側面と平面、簡単に言うとも一番捉えやすい形で描くわけです。カメ(スッポン)は上から見て描きます。鳥は横から見て描いてしまします。だから、カメを上から見た絵と、水鳥を横から見た絵を同一画面に描いてしまえます。一つの絵の中に側面と平面を混ぜても平気なんですから。それがこの時代の絵の特徴です。

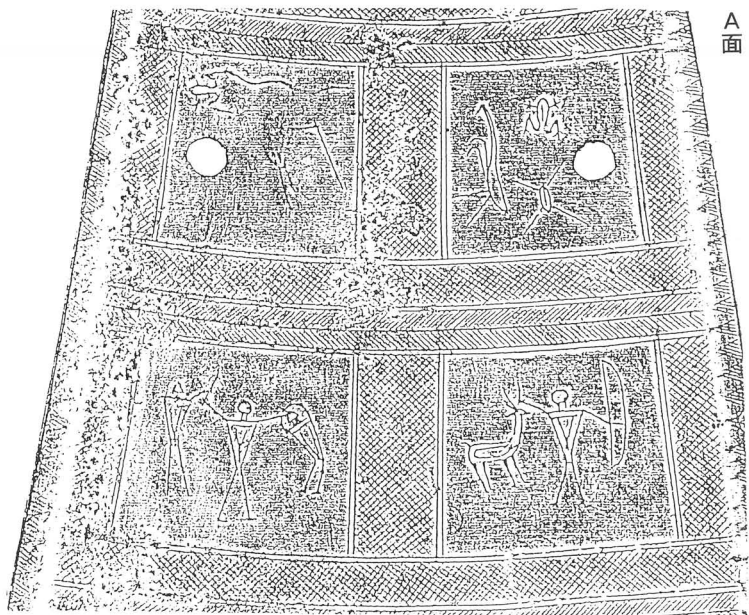


弥生土器に描かれた船の絵  
(奈良県清水風遺跡)

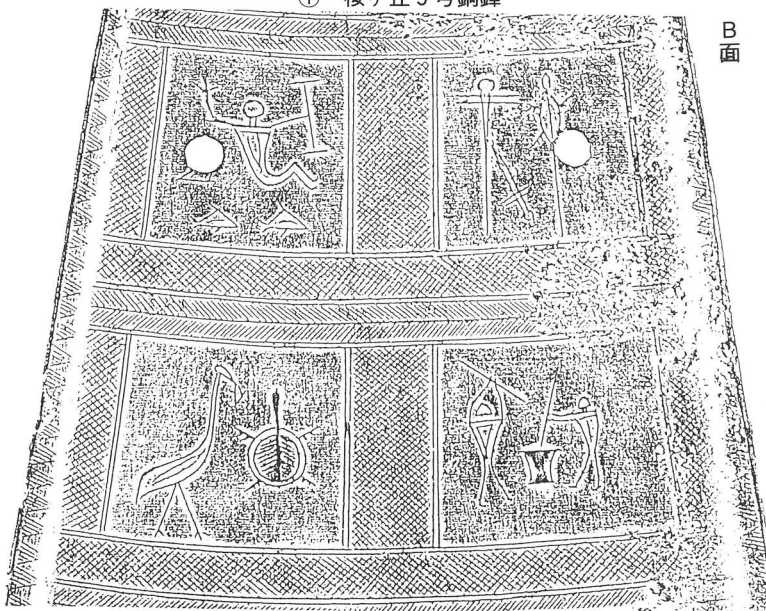
\* 銅鐸の絵 その3 絵の意味するもの

絵の描かれた銅鐸の中で注目すべきものに、神戸市桜ヶ丘の四号銅鐸・五号銅鐸、谷文晁やふちうという江戸時代の文人が持っていた銅鐸、香川県から出て来たと言われている銅鐸があります。この四つの銅鐸は、形も紋様も特徴がひじょうに良く似ているので、同じグループの人々が作ったと考えても良いものです。このうち、香川県の銅鐸が六区画で、後は四区画です。すべて表裏に絵があります。ただし谷さんの銅鐸の一方の面の上二つの絵は、発掘された後で壊してしまいました。全部で三四の画面に絵があります。この絵は、同じ技術者が連続的に作ったと考えられます。結果的には、桜ヶ丘五号鐸①↓桜ヶ丘四号鐸②↓谷さんの銅鐸③↓香川県の銅鐸④の順番に作られています。それは「あるため」にです。

ここにある絵は、全部をまとめて考えることができます。そういう意味でも重要なんです。この絵の中に人間が描かれています。丸頭と三角頭で表現されています。白にあい対して二人が杵を打ち下ろしている絵（①―B・④―B）はお餅もちについているのではなくて、稲穂を入れて粳もみをだうこくはくずしている風景です。合計四人が描かれています。四人とも三角頭です。狩りや魚捕りを

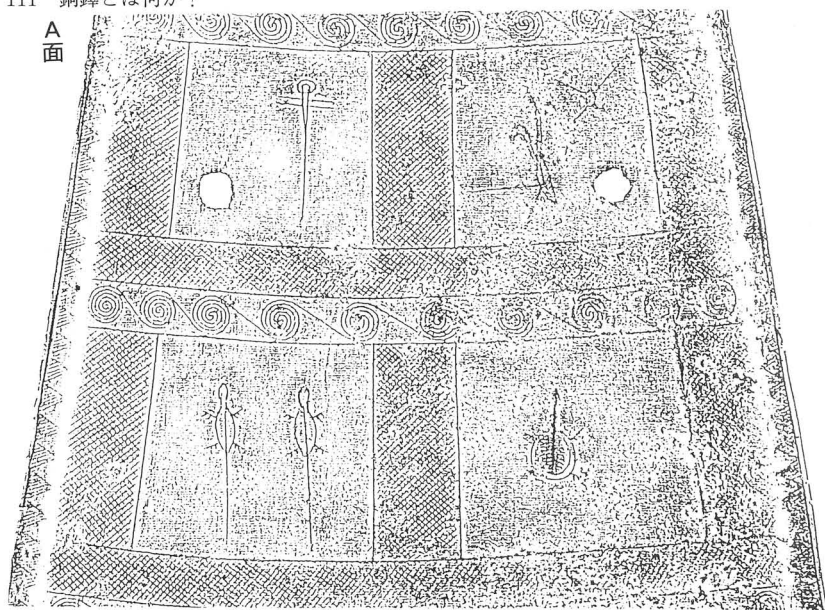
A  
面

① 桜ヶ丘5号銅鐸

B  
面

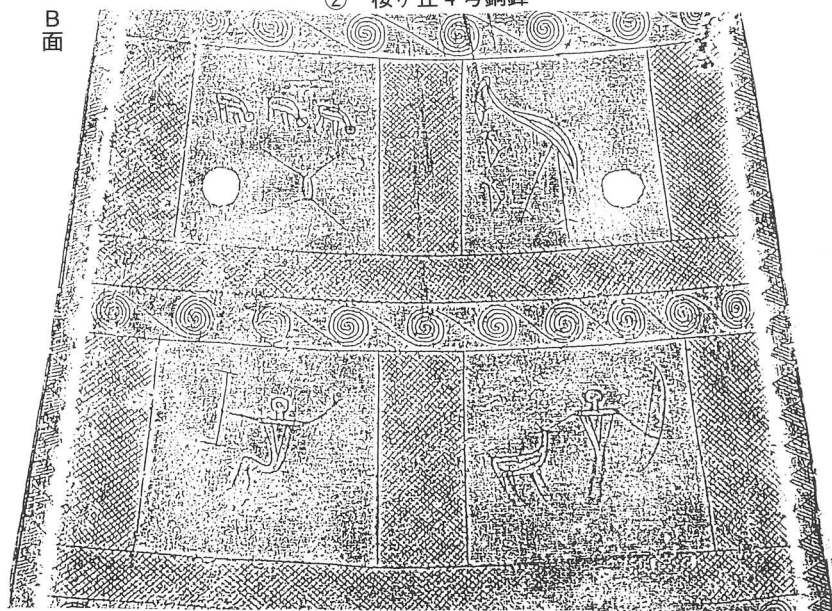
111 銅鐸とは何か？

A  
面



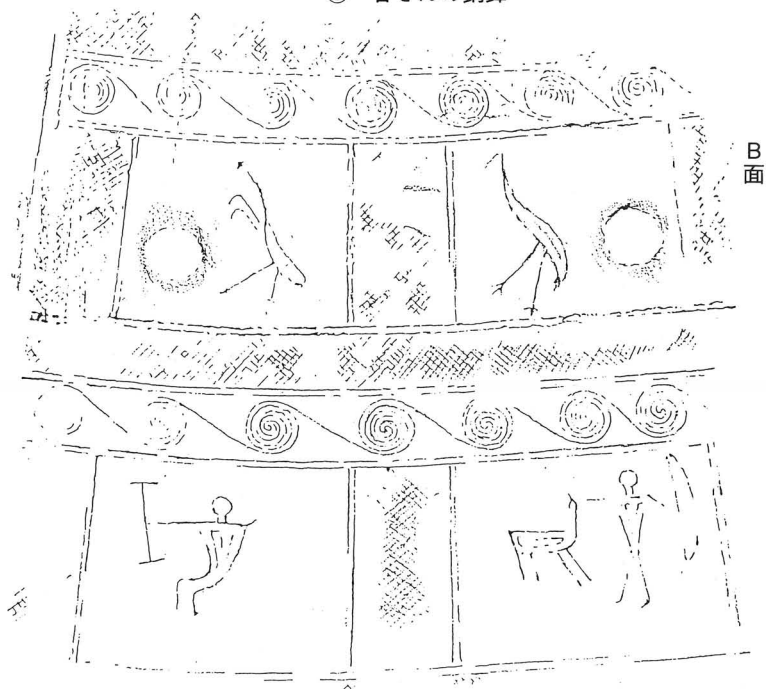
② 桜ヶ丘4号銅鐸

B  
面

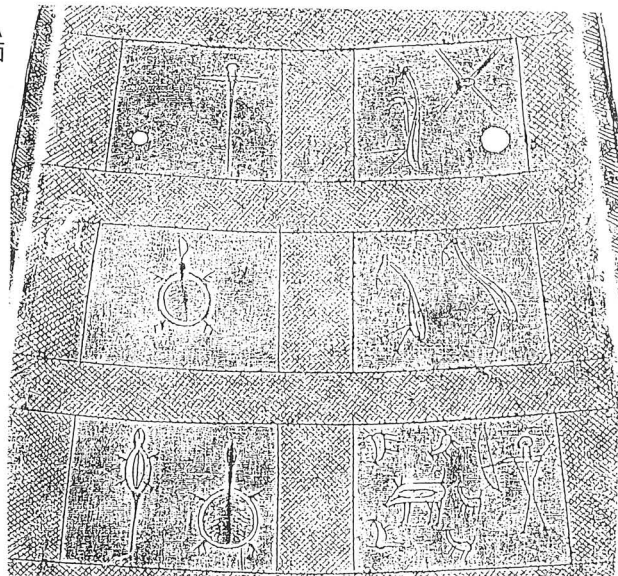




③ 谷さんの銅鐸

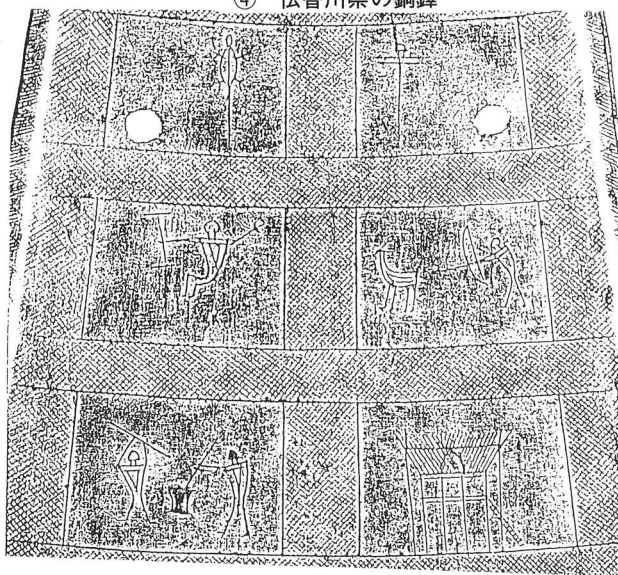


A  
面



④ 伝香川県の銅鐸

B  
面



しているのは丸頭です。民俗例では、脱穀は女の仕事で狩りや魚捕りは男の仕事となつていきますから、銅鐸に男女の仕事の分担が描き出されている、ということもあるわけです。

時間的なことがあつて詳しい説明はできませんが、私はこの紋様を詳しく、どこの部分に何が描かれているかという「法則」のようなことを調べました。

そうしますと、この四つの銅鐸については、狩りあるいは魚捕りの場面のあとに必ず高床倉庫や脱穀風景などの農業場面が来て終る場合と、農業場面を省略して狩りあるいは魚捕りの場面で終るものがあることに気がつきました。

桜ヶ丘五号銅鐸は狩りと魚捕りの場面があつて、最後は農業場面です。桜ヶ丘四号銅鐸と谷さんの銅鐸は、狩りの場面と魚捕りの場面で終つています。香川の銅鐸は、魚捕りや狩りの場面のあとに農業場面があつて終ています。

小林行雄という先生がおられまして、銅鐸の絵の解釈として「四つの銅鐸には自分より弱いものを食べる肉食動物が出て来る」と言つておられます。ツルかサギがお魚を食わえています。カメもお魚を食わえています。カマキリやトンボがいいますが、チョウ・セミ・マツムシ・スズムシはいません。自分より弱いものを食べるものが出て来ます。そして、人間も狩りの姿や魚捕りの姿で出

て来て、弱肉強食の世界が描かれています。小林先生は、「人間も狩りによって生きて来たけれど、神様にお米を作ることを教えられて今ではそれで暮らしているということを表現している」と言われたんです。

私はなんとか違う説を立てようと思ひまして、いろんな表われかたの法則を見たんですが、結果としては否定することはできませんでした。小林先生の論文集に先生と違う説を書こうとしたのが、師の影を踏もうとしたことになってバチが当たったのかもしれませんが……。いずれにしても、小林説を破ることはできませんでした。やはり、銅鐸の絵が農業に関わっているということについては、否定できません。

そのほかには、水鳥や鹿が出てきます。鹿には角がありませんから、私は雌の鹿だと考えました。弥生土器に描いてある鹿の大多数には、角があります。女が作った土器には雄の鹿が、男が作った銅鐸には雌の鹿が描いてあるということになります。これに対して、春成秀爾さんは、雌鹿ではなくて角が落ちたあとの雄鹿だと言っています。奈良では一月に角切りをやりますが、切らなければ二月か三月ころに角が落ちるんです。だけど、角のない鹿を角が落ちた雄鹿とみるのは誤りです。なぜかというと、証拠は二つあります。

桜ヶ丘四号銅鐸のように、銅鐸の下の方に鹿がたくさん並んでいるものがあります。その中にバンビがいます。鹿の子供は雌と一緒にいるもので、雄と一緒にはいません。もつと決定的な証拠は、つい最近東京国立博物館の井上章一さんという若い銅鐸研究者が見つけた面白いものなのですが、三重県の磯山<sup>いそやま</sup>という所の銅鐸にあります。今までその銅鐸にいた猪は二匹だったんですけれど、急に増えまして七匹になっちゃったんです。銅鐸の裾に鹿が六匹いて、猪五匹と対決しているんです。一番前のやつは角を持っています。あとの五匹は角がなくて雌です。そうすると、やっぱり角のあるのが雄、角のないのが雌に描き分けているのでしょうか。

脱線しますが、今ここに描いた鹿の絵は一番前のが丁寧に描けました。これは銅鐸を見る時にも役立つことでして、例えば原稿用紙の一枚目と五枚目とでは一枚目の方を丁寧に書きますね。銅鐸にもそれは見られます。つまり、一方の面が線の数や紋様など何も彼も整っていて、もう一方の面では線の数が減ったりするようなことがあります。もしかすると、今回の銅鐸についてもそれが言えるかもしれません。鋸歯紋に限れば、吊り手の部分はA面が一五個なのにB面は一四個だとか、鰭の部分はA面では飾耳と飾耳の間に入れた鋸歯紋の数



磯山銅鐸に描かれた鹿と猪の対決

が四個一組なのにB面では三個一組だとか、鋸齒紋に加える線がA面は七本なのにB面は六本だとかいうふうに、丁寧な作りはA面に集中しています。気持ちはわかりますよね、同じものをもう一つ作らなければいけないわけなんです。手を抜くというのは、大昔からあったんですね。

さて、銅鐸には猪や鹿がいますが、記紀や風土記にみえる古代の説話には、例えば、鹿を捕まえて水田を荒らさないように誓わせるというようなこともあって、鹿と農業は関係があります。鳥にしても、神様のお使いであったり、魂を運搬したりするというようなこともありましたから、動物が出て来るからと言って狩りに関係するとは言えません。かなり以前に、岡山の鎌木義昌さんは「古い銅鐸には狩りの場面が多く、新しくなると農業の場面になる」と言われましたが、これは誤りです。古くから農業の場面もあるし、狩りの場面もあります。そして、どうやら、農業場面の絵の方から、銅鐸と農業の関わりを類推しても良さそうです。

#### \* 銅鐸の用途と消えたわけ

弥生時代は、稲作が始まった時代です。大切な農業技術が伝わって来ました。

天気予報もなかった時代のことですから、技術とともに大切なのは、「農業の神様」です。弥生時代になると、基本的に縄紋時代の信仰が消え去ります。ごく少数残っているものはありますが、土偶は消え去ってしまいます。石棒という石器やその他いろいろの縄紋時代を特徴づけていたものが、消えてしまいます。縄紋土器を特徴づける「波状口縁」という波打っている口も消えます。私にはあれをおまつりの土器と思っているんですが、縄紋的な信仰、宗教より一歩手前の呪いや呪術が、弥生的なものに置き換わっていくわけです。農耕社会にとって一番大切なものは、「豊作をもたらしてくれる神様」です。だから銅鐸の用途として、稲作に関わる農耕のおまつりほどふさわしいものはないと考えます。

かつて、三品彰英という民俗学の先生は、「地の神・土の神が大切だった時代から、日の神・天の時代に変わる」と言われました。銅鐸は「地の神・土の神である」と。これが「日の神の時代になったから、銅鐸が消えるんだ」と、そして、鏡が現われて「天の神が奉られるようになる」と。それも一つの解釈です。私には、「銅鐸がなぜ消えたか」という最大の理由はよくわかるんです。それは、古墳の出現を考えればいいのです。古墳というのは、一人が死ぬ

と、その人のために丘を築いてお墓にするわけです。みんなの中の一人ではなくて、みんなから隔絶して突出した人が現れるのです。その人にとっては、自分がいかに偉いか、あるいは自分の家柄がいかに由緒正しいかと、自分を権威づける、自分を守る神様が大切なんです。そうすると、みんなのおまつりの道具は、じゃまになって来ます。だから、個人というものがひじょうに突出して来る時代になりますと、共同のおまつりというものが不要になります。これが銅鐸の消えた最大の理由だということは、確かだと思います。

古墳時代には「直弧紋ちよくもん」と呼ばれる紋様がありますが、これなどは、身分のある人が独占した紋様でしょう。そういうものが出始めます。弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけて、だんだんと身分の高い人が出て来て、その人は普通の人とは違う人になってしまいます。良く知られているように、北部九州ではたくさんの中国の鏡や朝鮮半島からの青銅製の武器などをお墓に入れています。ただ、面白いのは、それが入っているのも一般的な埋葬方法である甕棺だということです。考えようによれば、「みんなの中の一人」という意識の表われかもしれません。本当にみんなと違う人であれば、棺から変えないといけないわけです。身分の高い人が出て来ると、それは決定的になります。天皇

家などがその良い例です。天皇は自らのことを朕<sup>みかど</sup>と言います。自分の呼び名、自分の家の形、衣装から何から何まで全部違うというのは、差をつけて自分の偉さを示すためでしょう？ そういう世の中、そういう時代になっていったことによって、銅鐸は消えざるを得ない状況になっていったわけです。また一方では、銅鐸がこれ以上は作れないという「頂点」まで達していたことも事実です。

### \* さいごに

だいたい時間が来てしまいましたが、「銅鐸がいかにわからないものか」ということがおわかりになったかと思います。

銅鐸については、たくさん意見がありますが、その中でも面白いと思うのは、春成秀爾さんの説です。いろんな民俗例にもありますが、「自分達の領域に悪いものや悪い神が入って来ないように、いろんなものを埋めておまつりをする」と彼は銅鐸についてもそれを考えました。つまり、畿内の東の入口として滋賀県野洲の小篠原を考えて、西の入口として神戸の桜ヶ丘を考えて、南の入口として和歌山で群集してたくさん見つかる銅鐸というものを考えたんです。そういうことを始めとしているいろんな考えがありますが、ここではあまり

いろんな考えを紹介しない方がいいでしょう。時間がかかりすぎてしまいます。

「銅鐸とは何か？」—— わかりません。

銅鐸とは不思議なもので、「まったくわかっていないんだ」ということをわかっていただければ、ありがたいと思います。その点、今回の銅鐸は、「埋め方について重要な事実が認識された」ということを繰り返しておきましょう。

ご静聴ありがとうございました。